

[主催] 同志社大学 一神教学際研究センター

[共催] 同志社大学 神学部・神学研究科

CISMOR 公開講演会

トルコにおける宗教間の共生

—その課題と展望

① ドキュメンタリー・フィルム上映

「一神教の故郷、トルコの今をみつめて」

(2009年度 一橋大学 内藤ゼミナール 卒業制作)

② 講演

「トルコにおける宗教間の共生—その課題と展望」

内藤 正典 (一橋大学大学院社会学研究科 教授)

2010年3月6日(土) 14:00~16:00

同志社大学 今出川キャンパス

弘風館2階 K25 教室



○入場無料・事前申込不要

○問い合わせ先

同志社大学 一神教学際研究センター(CISMOR)

TEL. 075-251-3972

E-mail: info@cismor.jp

HP: <http://www.cismor.jp/>

【プログラム】

- | | |
|------------|-------------|
| 1) フィルム上映 | 14：00－15：00 |
| 2) 講 演 | 15：00－15：30 |
| 3) 質 疑 応 答 | 15：30－16：00 |

司会： 森 孝一

CISMOR センター長／同志社大学神学部神学研究科 教授

講師： 内藤 正典

一橋大学大学院社会学研究科 教授

【講師紹介】

■内藤 正典／一橋大学大学院社会学研究科・教授

1979年東京大学教養学部教養学科卒業、1982年同大学大学院理学系研究科地理学専攻博士課程中退。東京大学教養学部助手や一橋大学社会学部助教授などを経て1997年から現職。この間、シリアのダマスカス大学文学部客員研究員やトルコのアンカラ大学政治学部客員研究員として留学。専門は、現代イスラーム地域研究、イスラーム世界と西欧の国際関係。

2010年4月より、同志社大学グローバルスタディーズ研究科長に就任予定。

著書は、「イスラムの怒り」（集英社新書）、「イスラーム戦争の時代～憎悪の連鎖をどう解くか」（NHK ブックス・日本放送出版協会）、「ヨーロッパとイスラーム―共生は可能か」（岩波書店）など多数。

トルコにおける宗教間の共生～その課題と展望

一橋大学大学院社会学研究科教授 内藤正典

I ドキュメンタリーフィルム『一神教の故郷、トルコの今をみつめて』についての補足

(1) 撮影は2008年12月。イスラームの犠牲祭（アラビア語ではイード・アル＝アドハ、トルコ語ではクルバン・バイラム）とクリスマスが同時に12月に来るため、このチャンスを活かして、一橋大学社会学部の内藤正典ゼミナールの3年生によるフィールド調査を実施。その際に撮影したものを今回、CISMORのために編集した作品です。

(2) 作品中にでてくるトルコにおける各宗教・宗派について

◆トルコ共和国宗務庁

トルコ共和国建国当初から、イスラーム国家再興をめざす勢力とムスタファ・ケマル（アタテュルク）らのリーダーとが衝突。初代大統領アタテュルクは、過去のイスラーム帝国、オスマン帝国崩壊の現場を目撃し、軍人として第一次世界大戦の激戦を経験していたため、宗教勢力の政治介入を断固として排除する姿勢を明確にした。

1924年の憲法では、「イスラーム国教」条項があったが、25年には、宗務庁の前身となる機関を設立し、監督に乗り出す。

1928年の憲法では、「イスラーム国教」条項削除

1937年の憲法で、「トルコは世俗主義国家」と明記し、ここに世俗主義（laiklik）原則が憲法に定められた。「世俗主義」は、「国家の絶対不可分」と並んで、改正不可条項（憲法第4条）

宗務庁（Diyanet İşleri Başkanlığı）は、首相府の下に置かれ、イスラームに関する事項（イスラーム指導者であるイマームを公務員として任命・更迭、在外トルコ人同胞への宗教実践の支援としてイマームを宗務官として派遣、モスクの管理など）を行う。そのため、結果的には、国家予算が「イスラーム（スンニー派）」に支出されることになる。外から見ると、これは矛盾である。

国内でも、①世俗主義派は、国家がスンニー派イスラームを優遇するものとして批判する一方、宗務庁がないと、イスラーム組織が、各々勝手に活動を開始し、国家体制が揺らぐ危険があるという矛盾した見解を取る。②イスラーム主義派は、スンニー派を優遇するのは人口の95%以上を占める以上当然とする見解がある一方、自由な宗教実践を規制しているとの批判も。

現、アリ・バルダクオウル長官は学者出身で、政府（公正・発展党AKP）と協調する。外に向けては穏健な発言。他宗教との共生については、イスラーム的寛容が有効との立場。

◆正教会コンスタンティノープル総主教

英語では、Ecumenical Patriarch of Constantinopleで、「全地」の総主教とも。

現在は、コンスタンティノープルに総主教座が置かれて271代目のバルトロメオス1世

（1940年トルコ領生まれ）。初期のローマ、コンスタンティノープル、アレキサンドリア、エ

ルサレム、アンティオキアという5つの拠点の一つであり、現在まで、イスタンブールに総主教座。

正教会の精神的最高権威を自称。実際、西のカトリック教会は、東西教会の融和について教皇が会談する際、コンスタンティノープル総主教を相手とする。2006年には教皇ベネディクト16世がイスタンブールの総主教座を訪問。09年にはオバマ大統領とも会談。

ギリシャ正教、ロシア正教は、総主教座の見解によれば下位の地域教会。

1923年、トルコ共和国を列強側が認知したローザンヌ条約により、キリスト教徒のギリシャ人とアルメニア人、ユダヤ教徒については、マイノリティと認定。権利は維持されたが、その立場は微妙なものになった。

ギリシャ・トルコ関係の緊張に翻弄され、現在、コンスタンティノープル総主教座に直接属する信徒はトルコには少なく2000人程度。アルメニア人の7万人に比べるとはるかに少ない。

最大の問題は、後継者（トルコ国籍が要件だが神学校がないため困難）とハルキ神学校（1971年に閉鎖）の再開。インタビューのなかでバルトロメオス1世が指摘しているのはこの点。オバマ大統領も、トルコ訪問（2009年4月）の国会演説で、「神学校再開」に言及。

トルコの世俗主義原則を、各宗教との等距離という意味だというのなら「違う」という立場。彼らに対する規制のため。

バルトロメオス総主教に対するインタビューは日本では初めて。

◆ユダヤ教

登場するのは、イスタンブールの首席ラビ、イサーク・ハレヴァ。イスタンブールのユダヤ人コミュニティの宗教面での指導者。トルコ語では、ラビが「預言者」を意味するため「ハハム」という別称を使う。

インタビューのなかで、「イスラエルが建国されるまでは、ムスリムとユダヤ教徒との関係は良好だった」と主張している点が注目に値する。イスラエル建国に対して批判的見解。この点で超正統派とも類似点あり。

偶像の否定、礼拝や清めの儀式など、イスラームとの共通性を強調。トルコでの共生には問題なしとの立場。

◆アルメニア正教会

アルメニア正教（彼らは、正教会と異なり、非カルケドン派のため、上記のコンスタンティノープル総主教座や、いわゆるギリシャ正教とは異なる）のほか、カトリック、プロテスタントのアルメニア人もいる。イスタンブールに最も多い。第一次大戦時代の衝突を生き抜いて残った人々。アルメニア共和国のエチミアジンを中心とみなす、いわゆる「アルメニア問題」には介入しない。が、アルメニア「虐殺」問題は、教会から切り離された「民族主義」政党の問題であって、宗教は介在せずという立場。トルコで生きるうえでの知恵。フランス、アメリカなどでの「アルメニア虐殺の公認」「否認の処罰」などに対しては迷惑との主張が注目される。

◆アレヴィー派

イスラームのスニー派からはたえず異端ないし異教の扱いを受け、差別的処遇を受けてきた。アリを崇敬するゆえに、シーア派との近縁性を強調する国（シリアのアラウィー派政権）もあるが、トルコでは、アッラーを信じるもののスニー派とは異なる独立した宗教としての地位を要求。

公正・発展党政権下では、アレヴィー派に対する過去の抑圧を認め、関係改善を図る動きもあ

るが、政権首脳による差別的発言は後を絶たない。

トルコの内陸地域に分布するハジ・ベクタシ（教団）のアレヴィー派と、ドキュメンタリーに登場するアンタキヤなど地中海沿岸地域のアレヴィー派のあいだには、信仰実践の方法について違いがある。

聖者廟詣でが盛んだが、犠牲祭はムスリムと同様に祝う。礼拝はモスクではなく、「ジュムの家」というアレヴィー派独自の施設で行う。男女を隔離する発想がなく、聖者廟詣でや礼拝でも男女混合。

トルコでは、多数派のスニー派からの抑圧にさらされてきたため、共和国建国後は、むしろムスタファ・ケマルを支持し、世俗主義派に知識人を輩出した。

（3） アンタキヤという都市について

アンタキヤは、古くはアンティオキア。「キリスト」という言葉の発祥の地（使徒言行録）とされる。パウロもトルコ出身であり、この地は、キリスト教が、ユダヤ教の改革から、独自の世界宗教への変貌を遂げるきっかけとなった。

1930年代の末、フランスの委任統治領であったシリアから分離し、トルコ領に編入。このため、住民にはアラビア語を話す人も多いが、読み書きはすでにできない人も。

シリアの第二の都市アレッポまでは、わずか 50 キロ。

住民は来訪者にきわめてオープン・マインドで、シルク・ロードによる交易の長い歴史を髣髴とさせる。現在も、アレヴィー派、スニー派、キリスト教のギリシャ正教、アルメニア正教（非カルケドン派で、いわゆる正教会ではない）、シリア正教（これも非カルケドン派）、ユダヤ教徒などが混在。

旧市街のバザールの賑わい、近郊の森の美しさ、食文化の豊かさ、大変魅力的な都市である。現在、イスタンブール、アンカラから直行便で 1 時間。

II 共生をめぐる状況

1. 公正・発展党（AKP）政権による「よりリベラルに、より自由に」という政策は、スニー派イスラームの信仰実践を公的領域にも顕在化させる意図。多数を占めるスニー派国民の意思を体現するという意味では、民主主義の帰結。
2. しかし、国是としての世俗主義は形骸化する可能性。従来、イスラームが公的領域を侵犯する可能性があるとして、軍（世俗主義の決然たる守護者をもって自認）、憲法裁判所が、しばしば憲法違反として介入。スカーフ着用自由化についても、1990年代初頭に中道政権が自由化を図るも、憲法裁判所は禁止。現政権下での、憲法改正によるスカーフ着用自由化についてもすでに憲法裁判所は違憲判断を示した。
3. ただし、この種の原則論による介入は、アクターとしての憲法裁判所の判事が徐々にギョル大統領（AKP）の任命による判事と交代するため、いずれ抑止力を失う。
4. 軍部は、すでに介入できる状況にはないという認識。変わる可能性がないとは言えないが、軍高官もふくめて公正・発展党政権打倒のための「陰謀」（Ergenekon 疑惑）が裁判で審理中のため、容易に動けるとは考えにくい。さらに、EU 加盟交渉が、中断したため、さらに民主主義の未成熟を印象付けるような軍事介入には消極的。

5. 正教会（コンスタンティノープル総主教座）は、エキュメニカルな立場もあり、特権的地位を要求するも、公正・発展党政権は現状ではポジティブな対応に消極的。アメリカ、オバマ政権も総主教座を一応バックアップ。
6. アルメニア問題については、在トルコのアルメニア教会は距離を置いている。アルメニア・トルコの国交正常化は歓迎。政治運動には関与したくないという明確な姿勢。
7. ユダヤ教については、トルコ・イスラエル関係が、ガザ攻撃（2008～09年）により冷却化したことを受けて、ユダヤ教徒はトルコ人ムスリムからの攻撃を憂慮。
8. それでもなお、トルコにおける共生の現状は、他のムスリム諸国、ヨーロッパ諸国と比べて、共生をめぐる争点を明示しながら、ぎりぎりのところで交渉を継続してきた経験に裏打ちされており、今日の世界における「文明間対話」に実質的な貢献をしている。
9. 同志社大学 CISMOR とグローバル・スタディーズ研究科は、トルコが蓄積してきた経験も活かし、独自の「文明間対話から紛争抑止へ」の道筋を具体化させていきたい。

次回講演会のお知らせ

【主催】同志社大学 一神教学際研究センター

【共催】同志社大学 神学部・神学研究科

* 事前申込不要・入場無料

7世紀のイスラーム到来期におけるコプト教会の動向 —現代の視点より—

【日時】2010年3月13日（土）13:30～15:30

【会場】同志社大学 今出川キャンパス 神学館3階 礼拝堂

【講師】村山 盛忠（日本キリスト教団・牧師）